無縁・無援を超えて

いのちの現場から《8》

「宗教的サービス業」

聖職者かつ経営手腕が不可欠

「送骨」は、埼玉県熊谷市の曹洞宗見性院でも受け入れている。郊外の同寺境内には広々とした墓地が広がる。本堂には関西のある市役所から送付されてきた段ボール入りの遺骨があった。県内に住む女性が、「50年間消息不明」で遠くの地で人生を終えたことが最近分かった74歳の兄の供養を依頼してきたものだ。橋本英樹住職(53)が中から丁寧に骨壺を取り出し、「しっかり供養させていただきます」と合掌した。遺骨は「料金3万円」で境内の永代供養塔に納められる。

受け入れは全国から月10件ほど。理由は、代々の墓の維持が困難というだけでなく、貧困や独居生活で墓がない、離縁した故人を家の墓に入れたくないなど、「無縁社会」の縮図だ。だが住職は「永代供養だから法要は最初だけだろうと思ったが、遺族が一周忌、三回忌をしに来られることもあります」と語る。少し前にも、神戸から義弟の遺骨を送った80代の女性が法要と墓参に訪れた。親族間のトラブルから送骨したという。郵送という手段への風当たりに「故人や魂がどこにいるかは簡単に語れず、遺骨イコール仏とは言えないので、流通システムを利用するだけ。要は丁重に弔うこと、そこに宗教の役割がある」と述べる橋本住職は、しかし「無縁社会も結構、です。有縁、共同体も大事ですが個人の人権、自立が重要だ」と断言する。「法句経」から釈尊の言葉「犀の角のごとくただ一人歩め」を挙げる。

見性院に送られてくる遺骨パックの荷札

檀家制度を廃止

「人々の孤立は深刻な問題だが、今はもうそういう〝時代〟ということを前提に、コミュニティーに縛り付けられず、しがらみを断って自立しなければ。無縁は成熟社会への中途段階です」。だが自立することができない弱者が切り捨てられる〝時代〟をそのまま受容するのか、働き掛けを続けるのか、批判も多い住職の取り組みは、現代社会への宗教者の姿勢についての一つの問題提起にはなっている。そのような発想が反映された「ビジネス感覚での寺院経営」がそれだ。

6年前に檀家制度を廃止し、「会員」信徒制度にした。送骨や永代供養に古くからの檀家からクレームが付き、「これまで守られ、役所のようにつぶれないと思われてきたが、そこから逃れて住職主導の経営にしなければ〝寺院消滅〟時代に生き残れない」と考えた。「切ったのではなく自由意思の希望制。檀家と寺とが互いを私物化し、もたれて束縛し合う関係から信仰による真のつながりになったのです」と言い、結果として信徒数は3年で以前の檀家数の倍になったと説明する。

布施は定額制

次に葬儀や法要の布施を全て「定額制」にして公表した。「布施は自らの功徳のためであり、たとえ汚れた金でも良いことに使われて浄財となる。従来は理不尽なものが多かった」と説く。会員制にも様々な「ランク」があり、このような運営について橋本住職は「誤解を恐れず言うなら寺院は宗教的サービス業で、住職にはビジネス経営の手腕が不可欠。宗教も経済も人々を幸せにするものという点で同じです」と言い切る。ただ「宗教者が一般の経営者と違うのは、あくまで聖職者であり清貧を貫かなくてはいけない存在です」と。消費社会の論理からは「合理的」にも見えるが、数量化できない心の問題などが混在する主張には異論も多い。寺として何を目指すのか。

(北村敏泰)